

名作文庫通信

2021年春号



今季の特集

映画と名作文学

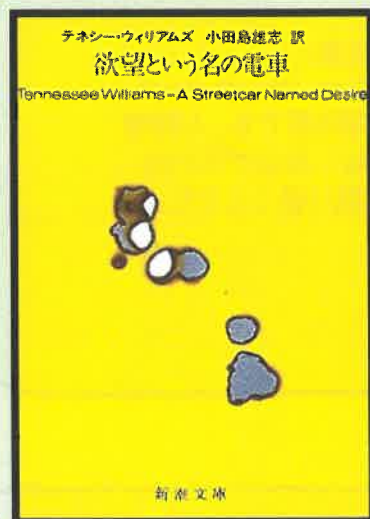


文学の感動を、本と映画で

【野生の呼び声】

ジャック・ロンドン/著 大石真/訳 新潮文庫/刊

セント・バーナードとシェパードの血をうけ、飼い犬として暮らしていたパックは、飼い主の邸から盗みだされ、アラスカに連れていかれ、樺犬にされてしまう。きびしい自然、容赦ないむちの響きに、パックの野性がめざましく――。



【欲望という名の電車】

テネシー・ウィリアムズ/著 小田島雄志/訳 新潮文庫/刊

欲望という名の電車に乗ってニューオーリアンズの下町に降り立ったブランチ。傷心のまま過去の夢に生きる彼女を迎えたのは、妹の夫らの粗暴なまでの“新しいアメリカ”の生だった。1947年初演、近代演劇史上不朽の名作。(TRC MARKより)

「名作文庫」とは？

下井草図書館では文学、哲学、思想、歴史などの名著名作を文庫版・新書版で集め、「名作文庫」としてご紹介しています。



今月の1冊 心の旅を描く物語

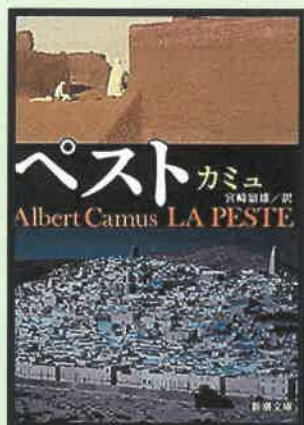


【グレート・ギヤッツビー】

フィッツジェラルド/著 小川高義/訳 光文社古典新訳文庫/刊

ギヤッツビーの絢爛豪華な邸宅では、夜ごと盛大なパーティが開かれ、多くの男女が集まっていた。謎多き男、ギヤッツビーが、富を築き上げたのは、最愛の女性に再会するためだった。しかし、あまりにひたむきで、情熱的な愛が、悲劇を招くことになる。

新着本 新しく買った本のご紹介



【ペスト】

カミュ/著 宮崎嶺雄/訳 新潮文庫/刊

アフリカのとある町でペストが発生。孤立状態となった町で、必死に伝染病と闘う人々の姿を描きながら、大きな悪や不条理が人間性を蝕む様子を克明に描き出す。戦争や、ナチス闘争の体験を寓意的に描いたといわれている。



【オリバー・ツイスト】

ディケンズ/著 唐戸信嘉/訳 光文社古典新訳文庫/刊

生まれ育った救貧院でも、徒弟として売られた葬儀屋でも、人間的な扱いを受けたことのない孤児オリバーは、道端である少年と出会い…。苛酷な運命に翻弄される少年とそれを取り巻く人々をドラマチックに描いた傑作。(TRC MARKより)

編集後記

名作映画を何本か観直した。『グレート・ギヤッツビー』は、ロバート・レッドフォード主演のものをみた。物語がしだいに緊迫していき、ショッキングな結末を迎える。脚本はフランシス・フォード・コッポラだ。

たのしみをしている映画がある。『マーティン・エデン(マーティン・イーデン)』。ジャック・ロンドンの自伝的作品だ。破天荒な人生だったので映画もおもしろいだろう。

発行: 杉並区立下井草図書館
杉並区下井草3-26-5
TEL 03-3396-7999

